

400年にわたり田畑 に用水を送り続ける

さが 嵯峨井堰



関ヶ原の戦い後、慶長8年（1603）森忠政は信濃松代から津山に入封すると、翌年から城下町建設にかかります。忠政は建設にあたり、南を流れる吉井川とその支流藺田川を防備の最前線として、その内側に城下町の主要部を形成しました。これによって城下町はよくも悪くも吉井川とのかわりが密接となっていくことになります。

まず、忠政は吉井川の流路を南寄りに固定する治水工事で、最初に行ったのが津山の氾濫原の整備でした。吉井川の左岸（北岸）に堅固な石塁を築いて城と城下町を守り、右岸（南岸）を全て水田にして遊水地を兼ねさせました。

そして、城の完成から16年を経た寛永9年（1632）、忠政はたびたび氾濫する吉井川の治水・利水対策として、強固な井堰建設に着手しました。これが院庄南側にある嵯峨井堰です。しかし、この井堰は度重なる洪水で何度も流されたため、村のために自ら人身御供になった「お福」の伝説も残っています。また洪水の被害で生活に困っていた農民をため池や井堰の工事の報酬で救ったという話もあるほど、水辺の城下町は川と切り離せないものでした。

完成して300年、練積張石の井堰は災害の度に補修されてきました。特に昭和37年（1962）の水害では中央部が決壊し、災害復旧工事も三度行われました。現在の嵯峨井堰は昭和47年に改修されたもので、長さ240m、満水時には約4万トンの水を湛え、



この井堰は慶長八年森氏美作国主として入封後寛永九年井堰並に水路の改修を官費にて命ぜらるると作陽史に記録されており完成年月は不明である。練積張石の井堰は三百年にわたる歳月を幾度かの災害に補修を加えながら維持管理されて来たが昭和三十七年九月の水害で中央部が決壊し以来三度の災害復旧事業と一部改修事業によって完成す昭和四十七年五月（銘文より）

津山市の都市用水として人々の生活を支える一方、農業用水として田畑を潤しています。

この井堰を源にした嵯峨用水は小桁まで14km、二宮の2kmを含めると全長16kmに及びますが、実際は3つのサイホンによって高低差を利用しながら網の目のように張り巡らされ、支線を含めると30kmに及ぶのではないかと考えられます。サイホンができるまでは、懸け樋で渡していたということです。

近年、この嵯峨用水の耕作面積は313ha（昭和27年）から84ha（平成21年）に減少し、農地の宅地化も進み、用水が忘れられた感は否めません。それでも中島・平福・八出・小桁等の田園地帯を流れる嵯峨用水が、素晴らしい田園地帯に融けこんだ風景を見ると、連続と続いてきた人々の営みを物語っているように思えます。

位置図



揚水用の水車



嵯峨井堰の用水

嵯峨井堰を源に本線は小桁まで14km、二宮分2kmを含めると全長16kmになる。



嵯峨井堰
全長240m、満水時保有水量4万トン